

2019年12月8日(日) メインホール 9:45-11:15

【歯科医師・教育講演対象プログラム】

インプラント治療における骨造成術のパラダイムシフト

医療法人天空会 デンタルチームジャパン
金山 健夫

高度に顎堤吸収した症例に対してインプラント治療を行うためには骨造成術が必要である。最もよく行われる骨造成術である上顎洞底挙上術と GBR は臨床応用されるようになって 20 年以上たち、予知性の高い骨造成法である事がわかっているが、より簡便・低侵襲・安全に手術を行うための術式の改良が今もなお模索されている。

近年様々な手術器具や材料が改良されてきたことにより、当院に於いても骨造成術に対する考え方が変わってきた。そこで今回、当院で行っている上顎洞底挙上術および GBR の術式を紹介し、特に以下の点に関して考え方の変遷を解説したい。

- ・上顎洞底挙上術の術式 (Lateral approach と Crestal approach) の選択基準は？
- ・上顎洞底挙上術ではどのような骨補填材を用いるべきか？
- ・GBR におけるメンブレン (吸収性・非吸収性) の選択基準は？
- ・GBR ではどのような骨補填材を用いるべきか？
- ・骨造成部には、どの程度待ってインプラントを埋入するべきか？
- ・骨造成部に埋入したインプラントは、どの程度待って咬合負荷をかけるべきか？

2019年12月8日(日) メインホール 11:30-13:00

"The implant therapy that changes tomorrow's practice"

Lecture Prof. Dr. Karl-Heinz Utz

For patients it must be possible to adapt dental prostheses not only aesthetically but also functionally as imperceptibly as possible and without any long-term damage. In addition to other parameters, occlusion and thus mandibular posture play an important role.

The lecture will deal with the topic of occlusion with special consideration of the integration of implants. How can occlusion be described? What do we know about the chewing surface? How many interocclusal contact points are required? What do the interocclusal contacts look like during laterotrusion? How high is the tactile sensibility of teeth and implants? How can occlusion be checked? What are interferences and are they pathological?

Differences in positioning the mandible in the treatment with small dental prostheses and on the other hand in reconstruction cases of the mandibular posture are shown. How high can the vertical relation be raised? When do joint related registrations have to be done? What registration techniques are displayed? Which difficulties can arise during clinical procedures?

The corresponding methods for the treatment of patients with reconstructions supported by implants are shown exemplified. An alternative impression technique for the restoration of dental prostheses on natural teeth and implants is presented. Finally, the indications of face bows are briefly presented.

2019年12月8日(日) メインホール 14:00-15:30

デジタル化にともなう現代補綴治療の変遷

ウエマツ歯科医院
植松 厚夫

チェアーサイドシステムの急速な進歩発展に伴い日本でも約2年前から使用可能になった **Intraoral Scanner** を有効活用したデジタル化を中心に以下の四つのトピックスで講演する。

1. 口腔内スキャナーを用いる利点は、従来のシリコーン等を用いて行なっていた印象法と大きく異なり、印象精度が良い悪いという比較ではなく、デジタルデータをコピーして何度も繰り返し使用できることやデータをスーパーインポーズして様々な補綴治療の診査診断や製作工程で有効活用できることである。
2. スキャニングに適した天然歯の支台歯形成は、光学印象に適した光の入射角度や反射を考慮したフィニッシュラインの形態や位置設定と、修復物の維持安定に関しては接着歯学を考慮して行う必要がある。
3. デジタル化されたガイドドインプラント治療の有用性は、天然歯の治療以上にデジタル化が進んでいる部分であり、インプラント治療の外科的侵襲を最小限にする治療法の選択が患者にとって大変有益である。
4. デジタルによって立案された治療計画によってガイドされたオーラルリハビリテーションは、従来おこなってきた咬合に関する診査診断や仮想された種々な補綴的基準を可視化する事でより正確で確実な治療になっていく可能性が高くなってきている。

現時点では、フルデジタル歯科治療は症例によって可能ではあるが、全ての症例に行えるまでには至っていない。しかしデジタル化は急速に進んでおり新たな感性をデジタル歯科治療に向けて磨き始める時期に来ている事は間違いないと考えられる。

2019年12月8日(日) メインホール 15:40-17:20

【歯科医師・教育講演対象プログラム】

インプラント治療とバイオメカニクス～改めて力と骨の視点から長期安定を考える～

吉野デンタルクリニック

吉野 晃

Branemark らにより開発されたインプラント療法の理論は、*osseointegration* に集約される。すなわち生活を営む骨組織と人工歯根が光学顕微鏡レベルで密着し、持続的な結合状態を呈することで咬合を回復し咀嚼機能を維持することができる。しかしながら、天然歯にみられる歯根膜をはじめとする歯周組織による緩衝機構をもたないため、上部構造体への過負荷は歯槽骨梁の吸収、*osseointegration* の破壊へと進行することが当初から問題とされてきた。感染症学を礎に理論を構築、発展させてきた歯科医学のなかで、力は長く一修飾因子とされてきた。しかし、細菌感染だけではどうしても説明のつかない症例に遭遇する度、臨床実感として我々はその疾患に対して作用する力の問題を意識してきたのも事実である。インプラントとオーバーロードについても議論が途絶えることはないが、「力のコントロール」に関する多くの報告を望見してみたところ、その内容は希望の域を出ないように思われる。疾患進行の背景に存在するであろう過度な力の関与を明らかにするためには、正しい知見の集積に努めるしかない。バイオメカニクスとは、生体力学または、生物力学と訳される。生体の外部または内部に作用する力とその力によって生じたさまざまな現象を解析する科学と技術である。

「骨」と「荷重」の関係は Wollf の機能適応形態の法則があまりにも有名であるが、この経験則が今尚原理原則であることに変わりはない。近年の骨粗鬆症研究や骨免疫学の発展は、骨が内分泌系の臓器として全身の健康を制御する可能性も示し力と骨の関係も新たな局面を迎えている。8020 運動にみるまでもなく歯科保健の目標は生涯にわたる健全な咀嚼機能の維持回復であるが、*osseointegration* 介して咀嚼力を直接骨に伝搬できるインプラントこそが歯科と健康寿命を繋ぐ糸口になると考えている。今回、インプラントの長期安定を、骨代謝を中心とした生物学的視点と機能回復のための補綴学的な視点から考察し、我々のインプラントが如何に健康長寿に寄与できるか考える機会にしたい。

2019年12月8日(日) Room E 10:00-11:50

【技工士・衛生士・教育講演対象プログラム】

インプラント手術のアシスタントワーク

医療法人社団石川歯科
中山 かおり

「痛い」「怖い」「早く終わらせたい」といったイメージの強い手術であるが、インプラント治療における手術の重要性は高い。特に組織の吸収が大きい場合には、硬組織・軟組織増大のため数回にわたる手術が計画され、患者に与える侵襲も大きくなる。

インプラント手術はチームプレイである。少しでも手術時間を短縮し、より正確な処置がなされるためには、アシスタントとなる衛生士も、手術の目的、術前の準備、管理、術式、手順、必要な器材、注意事項等、を正しく理解し、常に「自分も手術に参加している」という意識を持ちアシストすることが大切である。

今回の講演では、インプラント手術のアシスタントワークで役立つポイントと手技について解説したいと思う。

2019年12月8日(日) Room E 14:00-15:30

治療に関わる事の重要性 ~インプラント技工を円滑に行うためのラボサイドからのアプローチ~

Dental Lab Benefit Technology

中村 悠介

補綴修復治療において、特に咬合再構成、欠損補綴、審美修復など症例によっては製作する技工士の立場から、診査と診断、治療計画に関わる必要があると思います。得られた情報と担当医とのコミュニケーションから治療ゴールを共有し、治療計画への参加、治療途中の再評価においても状況を把握して提案する事で、最終補綴製作時の難易度緩和につながるだけでなく、治療結果に対しても差がでる程、技工士は歯科医療において大きな役割を担っていると考えております。

また治療の選択肢にインプラントを用いる場合は外科的侵襲を伴い、治療期間や費用など患者への負担が大きい治療の一つであり、そのため患者の治療結果への期待度も大きくなる場合が多いと思います。

今回はインプラント治療も含めた自身が補綴治療において患者満足度を得るために技工士の立場から提案できる事、またインプラント技工をなるべく円滑に行うために必要と考え行なっているチェアサイドとの連携や技工作業工程を症例を含め発表させていただきます。